



ロケハン

8月28日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

「神様はどうしてわたしたちのことを、
どうして見捨ててしまったんでしょう」
玲子が傍らでまじめそうな顔をしてそう呟くので
則之は吹き出しそうになるのをこらえ尋ねる。
「幸せそうにモンブランにかぶりつきながら
言うセリフかね、それ。主演女優くん」
彼の肩に頭を乗せたまま、
歌うように彼女は同じ呟きを繰り返す。
色彩がだんだんに失われていく病気が進んでいるで、
彼女が辛いであろうことは確かに間違いない。
ラベンダー色が好きと言っていた彼女は
もうその色がどこにあるのかわからない。
夏までにはモノトーンの世界に住むことになるだろう、
そしてやがて失明するというのが医師の診断だ。
「いま、一番したいことは何？」
彼は聞いた。「ぼくがきっとかなえてあげよう」

『彼しか知らない、彼女のほくろ。』という映画を撮って欲しい
というのが彼女の願いだった。
残された時間はあまりにも短いけれど、
則之はそれを撮ることを彼女に約束する。
人物は二人だけ、タイトル通りの官能的な映画で、
もちろん演じるのは玲子本人と則之自身だ。
寄りに寄った映像が彼女のほくろをこれ以上できない程の
アップでとらえているシーンから始まる。
「濃厚なシーンから始まるんだこの映画は」則之が言うと、
それを聞いて玲子はくすくすと笑う。
ほっそりとした彼女の指がやがて映り、
そこに映っていたのは掌だったことがわかる。
くっきりとした掌紋に埋もれたその小さなほくろは、
本人も知らなかったものを則之が見つけたのだ。
「ロケ地は決定だ。全部この掌で撮ろう」
ほくろに口づけをしながら彼が宣言し、彼女が同意する。

(「彼しか知らない、彼女のほくろ。」 ordered by futo-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro
a.k.a.hiro)

ロケハン

<http://p.booklog.jp/book/32844>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32844>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32844>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.